

# 世界をみつめて1

## 志を高く掲げて

石栗 勉



大学を出てから30余年海外生活を過ごし、平成20年より京都での生活が始まった。何事にも印鑑が必要など驚きの連続だ。とりわけ若者は、恵まれた便利な社会住んでいることを自覚し、日本に生を受けた幸運を誇りに思うべきであろう。これは自分では選べないことで、世界に一日一ドルしかなく、水、食糧に事欠き、懸命に明日を生きる人がいることを思えば、尚更のことである。

今日は「何でもあり、何とか手に入る時代」にある。これは、先人が何代にもわたり築き上げた努力の結果であり、大いに感謝すべきである。70年代冒頭の私たちの学生時代と比較するのは酷であろうが、我が国が経済成長をする前の段階で「何ごとも不十分な時代」であった。私のような当時の若者も、海外事情に興味を持ち、出かけたのだが財布は空のようなものだから、お金を溜めてシベリア鉄道経由で、言葉も分からぬルーマニア、ブルガリアに辿りついた先輩の武勇伝を、彼らが大切に持参した強力な火酒のアブサンで喉を焼きつつ、目を輝かせて聴き入ったものだ。

そんな時代だから、私にとっては「ともかく一回外に出てやろう」が目標になった。当時はNY往復が50-60万円もし、1ドル360円の時代だから、必然的にこの目標に資する職業を考えることになる。それは極めて限られたもので、外務省、商社、日本航空に入るか、マスコミで海外特派員になるかであった。私の場合は幸い外務省に入省でき、外に出てはみた。入省試験には語学が必要なのだが、高校での英文法尽くしの英語に嫌悪感を抱いた私は、大学全体を通じて英語から最も遠い運動部に籍を置いていた。しかし、試験で英語が必要となれば、目標達成のために、何とかしなければならぬものだ。

1976年、外務省の在外研修後2度目の勤務地

として、私は在インド日本大使館に赴任した。現在では経済発展で状況は一変しているが、当時は、朝になると聖なる牛はもちろん、駱駝、馬、豚、鶏、孔雀などが大通り、路地裏を我が物顔で走り回り、どちらが檻の外にいるのやら、大変なところへ来たと思った。驚くのはまだ早い。こちらとしては英語は分かっていたつもりだが、私についてインド人秘書の英語が全く分からないのだ。問い返すと、先方は正確を期すため更にアクセントを強め、益々理解不可能。かつ、インドの新聞の難しいこと。多分、植民地時代の表現が生きているのだろう。分厚い英語の辞書をひくと、用語説明の最後尾にそれらしき意味を見いだすのだ。ともあれ早口、難解なインド英語に慣れてからは、国連総会で飛びかう様々なアクセントも苦にならなくなった。英語を使おうとするなら、早めにインド英語に慣れることを勧めたい。英語はコミュニケーションの重要な手段である。

話を元に戻そう。「何でもあり」の時代に住む今日の若者は、ある意味で選択肢が多すぎて将来の目標設定が難しいこともあろう。加えて、現在は未曾有の就職氷河期と言われる。しかし、仮に今回は就職できないとしても、自分を磨く好機と考え、1年や2年の寄り道は無駄ではない。「何でも見てやろう」の精神は70年代冒頭と変わるまい。要は、志を高く掲げ、目標を定め、そこに向かって邁進することだ。そのことが語学の上達にも、自信にも繋がる。国際関係というが日本があつての「国際」だ。日本に生を受けたこと誇りを持ち、先人の努力に感謝したい。そうした日本観が外を見ることができると人間を作る。

いしぐり つとむ（教授・軍備管理・軍縮）